

project 2:

軸組の家

architect office:

y+M design office

地域材の活用は、
社会を動かす
仕掛けへと

話し手: y+M design office 吉本 英正

聞き手: 株式会社KUUMA 濱部 玲美(執筆)/株式会社文化工学研究所 北川 浩明

竣工写真: 笹の倉舎 笹倉洋平/Sasakura Yohei

2024年11月21日の夕暮れ。『軸組の家』のプロジェクトで、地域材利活用建築デザインコンテストを受賞(2023)した、神戸市須磨区にあるy+M design officeの事務所を訪ねた。

出迎えてくれたのは、創業者のひとりの吉本 英正さん。同じく創業者の三宅 正浩さんは地元である島根県との2拠点生活をしているそうで、週に1度ほど車で4時間かけて須磨区の事務所にやってくるのだとか。

創業者ふたりの個性が土壌をつくる、
y+M design officeの在り方

出会って28年になるというおふたりは、最初の就職先である積水化学工業株式会社のハウスメーカー(セキスイハイム)の同期。吉本さんが営業、そして三宅さんが設計としてチームを組んでプロジェクトを進行していた。当時から仕事以外でも仲が良く、一緒に建築を見に行ったり飲みに行ったりすることもある関係だったが、ふたりの性格はまったく異なるのだそう。

一級建築士であり一級建築施工管理技士、測量士、そして現在は成安造形大学で教授も務め、ずっと建築設計に携わる三宅さんと、建築士でありながらフィナンシャルプランナーの資格も持つ吉本さんは、大学生の頃はオーディオ機器が好きで前職の勤務先では化学品の企画部門にいたこともあるそう。

異なる思考と経歴とが混ざり合い、y+M design officeの業務においても、プロジェクトマネージャーとして全体を見ながら資金計画から設計プランまで一緒にたてる吉本さんと、設計業務を中心にチームを引っ張る三宅さんの連携がうまく相乗効果を生み、在籍する3名のスタッフ(お伺いした際は1名が産休中)とともに、プロジェクトを進行する日々。おかげで、設計前の人生相談から竣工後の問い合わせまで、施主との関係が長く続くことが多いのだという。



お話を伺いした、吉本さん



y+M design officeの事務所の最寄り駅、総合運動公園



軸組の家

地域材活用のはじまりは、
街を盛り上げる原動力として

y+M design officeが地域材を活用して設計をしたのは、2018年に完成した徳島県でのプロジェクトから。明治時代に建てられた、刻みタバコの生産や木材商として栄えた地元の商家を改修した三好市地域交流拠点施設『真鍋家 MINDE』で、徳島県産材を使用したのがはじまりだ。



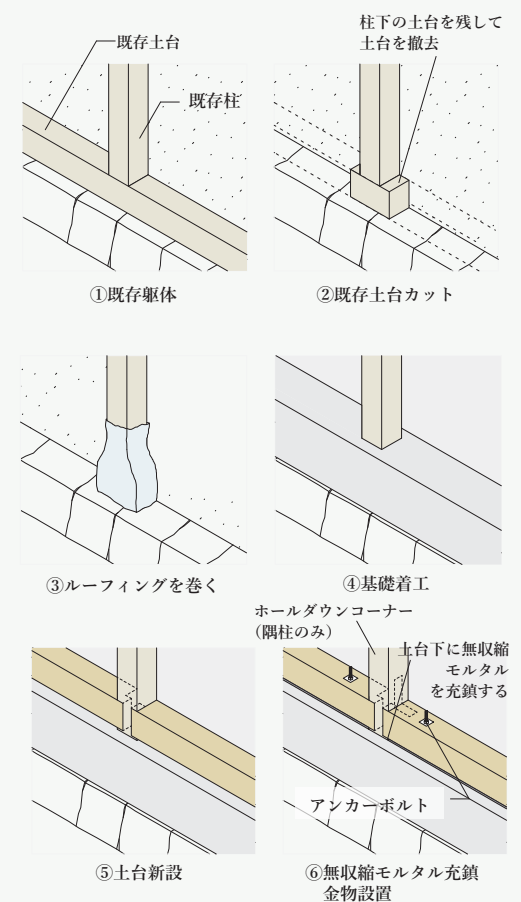
徳島県三好市の中山間部のまちにある真鍋屋MINDE

column:

古きを継承する、技術

『真鍋屋 MINDE』では、基礎もなく柱の根元が腐っていたため、新たに基礎を施工し、土台を新設、腐った柱の根元は入れ替えを行なった。構造的には分棟であった3つの蔵を接合し、その接合部に耐震壁を集中させることで中庭に向かって開くことを可能に。また通りに面したファサードはできるだけ補修程度にとどめ、隣家側の外壁を耐震補強してバランスをとり、新設した鉄骨造のテラスを介して耐震化した木塀にも地震力を負担させている。

基礎工事手順



既存の基礎・土台・柱・梁など出来るだけそのまま利用し、構造補強を行った。

移住者も増えつつある中山間部のまちに、新旧混じり合う住民の交流施設として古民家を再生させる計画のもと、設計がスタート。当時、2014年に制定された「まち・ひと・しごと創生法」をきっかけに地方創生の動きが活発になっていた頃。地域材の活用を支援する動きは盛んであった。

行政のバックアップもあり、地域の木材業者とのつながりも生まれ、もともとあった古い土壁や梁などの古材をできる限り継承しながら、新たに徳島県産材を組み合わせて設計。在るものの特性を汲み取りながら活かすという新築よりも難易度の高いプロジェクトに、スタッフ総出で取り組んで、現場にも足繁く通い完成に至ったのだとか。

現在、地域住民の挙式場として活用されたり様々なイベントを定期的に行う場となったりしており、四国のへそと呼ばれる三好市の地域交流施設として多くの出会いの場となっている『真鍋屋MINDE』。「不特定多数が訪れる公共の場で地域材を活用することは、より一層地域の魅力発信することにつながるのでは」と話す吉本さん。地域材の活用は、メッセージを伝えるメディアとしての顔つきも持っているようだ。



真鍋家 MINDE

兵庫県産材の隙間から 優しい光が射す軸組の家

前述のプロジェクトの流れもあり、2018年に完成した『軸組の家』でも兵庫県産材を活用。JR姫路駅からほど近い場所にある間口6mほどの敷地いっぱいに木造の軸組をつくり、間口を2等分して奥行き方向に細長い2つのスペースを。東側半分を屋内空間、西側半分を半屋外空間として、半屋外空間は通りに面して開放的にすることで屋内空間と通りをつなぐインターフェースになっている設計だ。



軸組の家 外観

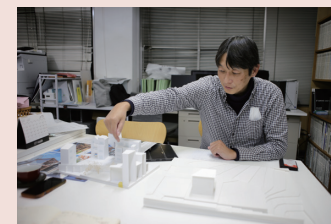
西側の半屋外空間が印象的である。施主からの相談時には既に土地が決まっており予算のほとんどがその購入費に充てられ、工事費をできるだけ抑えたいという要望を受けて生まれたのが、住みながら拡張していくこともできる西側の半屋外空間なのだ。長い時間軸で変化していくことを許容する住み手に寄り添った提案は、軸組の家の随所に見られる。

西側の屋根は、野地板の隙間をグラデーションにすることで屋内への日射取得をコントロールしている。どのプロジェクトにおいても、設計する立地の太陽高度をふまえて、住み手に優しい光が差し込むよう心がけてい

るのだとか。完成後の暮らしがよりイメージしやすいよう、提案時の模型づくりにもこだわりが。周辺環境の



模型も一緒につくることで周りの建物がどのように干渉してくるか、また周辺模型にも窓をいれることで、設計している建物のプライバシーをどのように確保するかも同時に検討している。



建物の形状や開口を工夫することで、寝室以外はカーテンのいらない家を提案することが多いそうで、採光や通風の確保

できる住み手の暮らしやすさだけでなく、湿気が溜まりにくくなるため構造的にもいいと話す、吉本さん。

どんな意匠でも、どんな材でも、住み手が使いこなしていかないと長く続いていかない。担い育てていく住み手を慮る気持ちで、建物をより生き生きさせることにつながるのだということを感じさせてもらった。

ただの材料ではない 地域材から描く、未来

木材選定の際は、集成材(小さい材を接着剤で継いだもの)ではなく、製材(原木から木取りされたもの)をできるだけ活用するようにしていると話す吉本さん。集成材が完成するまでの工程を鑑みると、木材産業へのバックが少なくなることを懸念しているのだ。せっかく地域材を使うのであれば、少しでも地域の産業が盛り上がることに貢献していきたい。地域を元気にするきっかけにもなり得る可能性も示唆してくれた。

ただ、一般に流通している製材は4mのものが多く、そのなかで構造計算をしながら設計していかなければいけないという制約もある。日本の住宅居室のほとんどが

短辺4m以内であり、それに合わせて製材の加工システムが成り立っている背景からだ。

林野庁『森林・林業白書(2023年)』によると、着工建築物において床面積ベースでみると、低層住宅(1~3階建て)の木造率は80%を超えるが、低層非住宅建築物及び中高層建築物(4階建て以上)の木造率は低位。住宅(木造軸組工法)における国産材の使用割合は約5割。現在、公民問わず、中大規模建築の木造化が世界的に進められており、国産材の利用率を増やしていくことが重要とされている。

国産材、そして地域材の活用は、これから増えていかざるを得なくなるのだろう。そのなかで、ただ材料として使うだけではなく、住み手や使い手の未来の姿を想像しながら、経済そして社会により波及効果を生んでいく仕掛けとして活用していくy+M design officeの取り組みを見せてもらった。